

亡命、延宝九年（一六八一）、長崎の興福寺に住む。水戸光圀に招かれて大徳寺に住み、寺名を寿昌山祇園寺と改め、開山第一世となつた。詩文書画に長じ、弹琴をよくした。元禄七年九月水戸から相模国箱根塔の沢温泉に入湯し、途中東海道を鎌倉、金沢へと寄り、能見堂の風景を鑑賞した上、詠んだものと思われる。

無性居士（京極兵部高門）（一六五八—一七二一）江戸生まれ。但馬国豊岡の領主、京極飛騨守高直の子。幕府役として寄合衆となる。中院通茂の門人、国学者で歌をよくす。金沢を来訪した時期は不明であるが、「走湯行記」「湯沢紀行」などの著書もあり、元禄の歌人としては名家の統を嗣ぐものとして重んぜられていた。

十二 金澤能見堂八景縁記

夫当山の濫觴を尋るに 今にいたりて九百有余年の
むかし 人皇五十九代宇多天皇の御代仁和年中に巨勢の
金岡といふ絵師 東へ下りしころ 此松が根にてかゝる
海山の勝景を書写さばやとて しばらくめで侍りしうち
雲霧のたちまひに浦波嶋山のさま千変万化に見へわたれ

ば 終に筆を捨て賞敷せしとなん それより里人 此老
木を名づけて筆捨松といふ 其後七十余をへて 寛仁
年中御堂関白藤道長公此所に来り此絶景をめさせ給ひ
て草庵を結ばせ給ひしは すなはち此能見堂なりけり
其折しも彼関白殿めし給へる御ぞをぬきて 此正面なる
松が枝に懸させ給ひしを 里人から見申てより関白の絹懸
松とは中伝へしなり 夫より相つゞきて入江の上に松の
森の見ゆるは 其さまのにたるをもて塗桶山と申て富士
浅間大ぼさつをぞ祝ひ奉りぬ 扱又此金沢八景と申は延
宝年中唐土の沙門東皐心越禅師 常陸の国水戸に来りて
居住し給ひしが かゝる勝景を聞及ばせ給ひ 此山堂をと
はせ給ひつゝ彼国なる西湖瀟湘の風景に其まゝなりと幽
賞のあまり 一夜燈火のもとにて八首の詩を作りて雅懐
を伸給ふ すなはち其自筆の一軸今に当山の宝物とはな
りにけり さればその八景と申は先此右の山のふもととな
る田間の小水の流より 入江へかけて内川と申を 彼紅
天の寒色に比して内川暮雪と名付 同く向ふの人家の見

ゆるを小泉村と申に 彼瀧湘の夜雨のさひしさを忍びて
小泉の夜の雨と称し給ふ むかふの入江の上に懸りたる
橋より右のかたを瀬戸と申を 洞庭の秋色に擬して瀬戸
の秋月ととなへ 橋より左の人家のあたりを洲崎と申に
山市の晴景を移して洲崎の晴嵐といひ 夫より左へあた
りて平瀧と申 沙溪の見ゆるを平沙の秋興になぞらへて
平瀧の落雁とよばせ給ふ 相つゞきて東南のはてなる山
より人家のあたりを野嶋と申に 魚村の夕陽をしたひて
野嶋の夕照とのせ給ふ 夫より東の浦を乙艦と申に遠
浦の漁舟をとひいで乙艦の帰帆とよばせ給ふ 称名寺
のみは目には見へねど耳にこたへてあはれをもよほす遠
寺の鐘声をおもひやりて称名の晩鐘とは観じ給ひしなり
されば此称名寺と申は仁王八十九代龜山の院の御宇文永
年中北条越後守平実時みことのりをかうふりて草創し給
ひすなはち審海上人開基の道場なり 寺領貳千石余寄附
し給ふ そのころしもみことのりによりてもろこし船此
うらによせきて 西天東地儒釈道の諸経其余の内外の典

籍などここに此寺におさめつれば 今にいたりて金沢文
庫とぞいふめる 扱又彼心越禪師の後京極兵部無生居士
和歌を詠じて和し給ふ 夫より此かた八景の絵図并に右
の詩歌を板行して当山より出しぬ さればかゝる八景を
一目に見るのみか其余の景趣かぞへ尽しがたし 金沢に
亀井 染井 白井 赤井 中井 大井 所小井 所の七井あり 美
女石 姥石 福石 飛石の四石あり 四望亭 九覽亭の二亭
あり 其外 西湖梅 黒梅 桜梅 文殊桜 普賢桜 青葉の
楓 蛇木 三本杉の八木もありしを 大かたかれてはづかに
残れるが彼称名寺に侍れば いつれも尋ねゆきてみそな
はし給へかし 其外にまだ是より見ゆるは 此東のみねな
る二木の松を村君大夫の夫婦松といふ 夫より相つゞき
て山のすそなる入江のみぎはにたてるを君が崎のひとつ
松と申なり 瀬戸の入江の橋のうちなる小嶋をば 照手
の姫のいぶし嶋といひ 雀が浦のひとつ松は 野嶋のむ
かふなる室木村の辰巳にあり 野嶋山の左りに見ゆるは
烏帽子嶋 その左に見ゆるは夏嶋 其さきにとおくみゆ

るは猿嶋とぞいふなる 夫より向ふの海外の東南につゞけるは安房上総の山々にて すなはち鋸山もそれが中にぞみゆめる 午より未申は浦賀より鎌倉かけて遠近の連山まことに波濤のごとく なかにわきてならべる高ねのみゆるは三浦の二子山にこそ有けれ 又此筆捨松の下より西にあたりて四時にたへぬみねのしら雪は かのみな月の望に消つゝ其夜ふりけること むかしの人の詠じけるするがの富士山にこそありけれ されば久かたの雲の上人さへ わくらはにはとほせ給へれば しらぬ日のつくしより みちのくなるえぞが千嶋の人までも 折にふれ時につけつゝ尋ね来て あるは詩を作り あるは歌をよみあるは発句などしつゝ ころ／＼におもひをのべてぞ此佳景をばめで侍るぞよ かくて居ながらに五ヶ国の勝興を見はるかす侍れば 外にたぐひのなき東海の仙窟天下の絶景にこそ侍れ

(金沢能見堂八景縁記)

〔解説〕 本書には、奥書もなく、いつ誰によつて書かれたか不明であるが巻頭の文章から推測すると天明の頃(一七八〇年代)

と思われる。内容は能見堂の由来、巨勢金岡、藤原道長の来訪金沢八景の意味と称名寺、金沢文庫の歴史等を記している。

十三六 浦

曲柄 三番目

季節 九月

所 横浜市金沢区金沢町称名寺

前シテ 里女

後シテ 楓の精

ワ キ 旅僧

ワ キ ツ レ 従僧

間狂言 里人

次第 フキツレキ

思ひやるさへ遙かなる。思ひやる

さへ遙かなる東の旅に出でうよ

名ノリ

これは洛陽の辺より出でたる

僧にて候。我いまだ東国を見ず

候程に。この秋思ひ立ち陸奥の

果までも修行せばやと思ひ候

逢坂の。関の杉村過ぎがてに。関の杉村過ぎがてに。行方も遠き湖の。

舟路を渡り山を越え。幾夜な夜なの草枕。明け行く空も星月夜鎌倉山を越え過ぎて。六浦の里に。着きにけり六浦の里に着きにけり

ワ
キ

千里の行も一步より起るとかや。

遙々と思ひ候へども。日を重ねて急ぎ候程に。これははや相模の国六浦の里に着きて候。この渡りをして安房の清澄へ参らうずる

にて候。又あれに由ありげなる寺の候を人に問へば。六浦の称名寺とかや申し候程に。立ち寄り一見せばやと思ひ候。なうく御覧候へ。

山々の紅葉今を盛りと見えて。さながら錦を晒せる如くにて候。

都にもかやうの紅葉の候べきか。

又これなる本堂の庭に楓の候が。

木立余の木に勝れ。たゞ夏木立

の如くにて一葉も紅葉せず候。

いかさま謂はれのなき事は候まじ。

人米りて候はゞ尋ねばやと思ひ候

なうく御僧は何事を仰せ候ぞ

さん候これは都より始めてこの所

一見の者にて候が。山々の紅葉今を

盛りと見えて候に。これなる楓の

一葉も紅葉せず候程に。不審をなし候

げによく御覧じとがめて候。古

鎌倉の中納言為相の卿と申し人。

紅葉を見んとてこの所に来り

給ひし時。山々の紅葉未だなりしに。

この木一本に限り紅葉色深く類ひ

なかりしかば。為相の卿とりあへず。

如何にしてこの一本にしぐれけん。

呼掛
シ
テ

ワ
キ

シ
テ

山に先だつ庭の^{もみぢ}桧葉と詠じ給ひ
しより。今に紅葉をとどめて候

面白の御詠歌やな。われ数ならぬ

身なれども。手向の為に斯くばかり。

古り果つるこの一本の跡を見て。

袖の時雨ぞ。山に先だつ ^{シテ} あら

ありがたの御手向やな。いよく

この木の面目にてこそ候へ ^{ワキ} さて

さて前に為相の卿の御詠歌より。

今に紅葉をとどめたる。謂はれは

如何なる事やらん ^{シテ} げに御不審は

^{ことわり}御理。前の詠歌に預かりし時。この木

心に思ふやう。かゝる東の山里の。

人も通はぬ古寺の庭に。われ先

立ちて紅葉せずは。いかで妙なる

御詠歌にも預かるべき。 ^{カカル} 功成り

名遂げて身退くは。これ天の道

なりと云ふ古き詞を深く信じ。

今に紅葉をとどめつゝ。たゞ常磐

木の如くなり ^{ワキ} ^{カカル} これは不思議の

御事かな。この木の心をかほど

まで。知ろし召したる御身はさて。

如何なる人にてましますぞ ^{シテ} 今は

何をか^{つつ}裏むべき。我はこの木の精

なるが。お僧尊くまします故に。只今

現れ来りたり。 ^{カカル} 今宵は此処に

旅居して。夜もすがら御法を説き

給はゞ。重ねて姿を見え申さんと

夕べの空も^{すさま}冷しく。この古寺の

庭の面。霧の籬の露深き。千草の花を

かき分けて行方も知らず。なりに

けり行方も知らずなりにけり ^{中入}

所から。心に叶ふ称名の。心に叶ふ

称名の。御法の声も松風もはや

更け過ぐる秋の夜の。月澄み

わたる庭の面^{ワキ}^{ツレ}夏^レつゝしむら。

^待^{ワキ}^{ツレ}^レ^{ワキ}^{ツレ}^レ 待 謠

^下 地 歌

後シテ

面白や寝られんものか面白や

あらありがたの御弔ひやな。妙なる

値遇ちぐの縁に引かれて。二度ふたたび此処に

来りたり。夢ばし覚まし給ふなよ

不思議やな月澄みわたる庭の

面に。ありつる女人とおぼしくて。

影の如くに見え給ふぞや。草木

国土悉しつかい皆成仏の。この妙文を疑ひ

給はで。なほく昔を語り給へ

それ四季をりくくの草木。おのれ

おのれの時を得て。花葉様々の

その姿を。心なしとは誰か言ふ

まず青陽の春の始め。色香妙

なる梅が枝のかつ咲き初めて

諸人の心や春になりぬらん

又は桜の花盛り。たゞ雲とのみ

三吉野の。千本の花に。若くはなし

月日経て。移れば変る眺めかな。

桜は散りし庭の面に。咲きつゞく

ワ
カ
ル
キ

郊の花の。垣根や雪に紛ふらん。
時うつり夏暮れ秋もなかばに
なりぬれば。空定めなき村時雨。

昨日は薄きもみぢ栴葉も。露時雨もる

山は。下葉残らぬ色とかや

さるにても。東の奥の山里に

あからさまなる都人の。あはれも。

深き言の葉の露の情に引かれ

つゝ。姿をまみえ数々に。言葉を

交はず値遇ちぐの縁。ふかき御法を

授けつゝ。仏果を得しめ給へや

更け行く月の。夜遊をなし。色なき

袖をや。返さまし。序の舞

秋の夜の。千夜を一夜に。重ねても

言葉残りて。鳥や鳴かまし

八声の鳥も。数々に。八声の鳥も

数々に。鐘も聞ゆる。明方の空の

所は六浦の浦風山風。吹きしをり

吹きしをり散るもみぢ栴葉の。月に照り

添ひて。からくれなるの庭の面

明けなば恥かし。暇申して。帰る

山路に行くかと思へば木の間の

月の。行くかと思へば木の間の

月の。かげろふ姿と。なりにけり

(観世流謡本)

〔作者〕 金春禅竹(二四〇五—一四七〇の頃)その他諸説あるが確定できず。

〔解説〕 藤原為相の家集中、「いかにしてこの一本のしぐれけむ、山に先だつ庭のみぢ葉」とある歌の木の精を主人公とした作品。都の僧が東国行脚の途中、武蔵金沢(曲中では相模六浦)の称名寺に立ち寄り、一本だけ紅葉しない楓の由来を里女より聞く。里女は語り終わるなり木の精に変じて消え、夢幻の中で舞を披露する。終局に典雅な序の舞を配した典型的な靈物である。

十四ほお放か下ぞお僧

曲柄 四番目
季節 九月

所 前 下野国

後 横浜市金沢区瀬戸 瀬戸三島神社

前シテ 小次郎の兄(禅僧)

後シテ 前同人 (禅僧)

前ツレ 牧野小次郎

後ツレ 前同人

ワ キ 利根信俊

間狂言 信俊の下人

名ッレ かやうに候者は。下野の国の

住人。牧野の左衛門何某が子に。

小次郎と申す者にて候。さても

親にて候者は。相模の国の住人。

利根の信俊と申す者と口論し。

念なう討たれて候。親の敵にて

候程に。討たばやとは存じ候へ

ども。敵は猛勢我等はたゞ一人

にて候間。思ふにかひなく月日を
送り候。また兄にて候者は。幼少

より出家仕り。辺あたり近き会下に候。

余りに便もなく候間。立ち越え

この事を談合せばやと存じ候。

いかに案内申し候シテ 誰にて渡り

候ぞツレ 某が参りて候シテ や。此方へ

渡り候へ。さて只今は何の為に来り

給ひて候ぞツレ さん候只今参る事

余の儀にあらず。我等が親の敵の事。

討たばやとは存じ候へども。敵は

猛勢我等は唯一人にて候程に。

思ふにかひなく月日を送り候。

あはれ諸共に思し召し御立ち候へ

かしシテ 仰せは尤もにて候へども。

我等が事は幼少より出家の身にて

候程に。今更如何にて候ツレ 御意は

さる事にて候へども。親の敵を

討たぬ者は不孝の由を申し候

さて親の敵を討つて孝にそなはり

たる事の候かツレ なかくの事。

語 唐土の事にやありけん。母を悪虎に

取られ。その敵を取らんとて。百日

虎伏す野辺に、出でゝ狙ふ。ある

夕暮に。尾上の松の木隠れに。虎に

似たる大石のありしを敵虎と思ひ。

番つがへる矢なればよつ引いて放つ。

この矢即ち巖に立ち。忽ち血流れ

けるとなり。これも孝の心深きに

より。堅き石にも矢の立つと申し

候へば。たゞ思し召し御立ち候へ

これは面白き事を引いて承り候

ものかな。この上は諸共に思ひ

立たうずるにて候ツレ 然るべう候

さてかの者には何として近づき

候べきツレ 某きつと案じ出したる

事の候。この頃人の翫もてあそび候は

放下にて候程に。某は放下になり

候べし。御身は放下僧に、御なり

候へ。かの者禅法に好きたる由

申し候程に。禅法を仰せられう

ずるにて候シテ げにこれは面白き

料簡にて候。さらばやがて思ひ

立たうずるにて候ツレ 尤もにて候

いざ／＼さらばと思ひつゝ。行脚の

姿に身をやつせばツレ 我も嬉しく

思ひつゝ。放下の姿に出で立ちて

さもす／＼とツレ 立ち出づる

故郷の。名残もさぞな有明の。名残も

さぞな有明の。つれなきながら

存ながらふる。命ぞ限り兄弟は我が心をや。

頼むらん我が心をや頼むらん 中入

歩みを運ぶ神垣や。歩みを運ぶ

神垣や。へだてぬ誓ひ頼まん

これは相模の国の住人。利根の

信俊と申す者にて候。我この間

うち続き夢見悪しく候程に。

後シテ

瀬戸の三島へ参らばやと存じ候

面白の我等が有様やな。僧俗二つの

道を離れ。姿言葉も人に似ぬ後ツレ その

振舞を隠かくれが処と。思ひ捨つれば安き

身をシテ 知らでなどは迷ふらん

落花一陽の春を知らず。白雲青山に。

蔽ふとかツレ 流水山上の秋に

してツレテ 紅葉を争ふ。謂はれあり

朝の嵐夕べの雨。朝の嵐夕べの

雨。今日また明日の昔ぞと。夕べの

露の村時雨定めなき世に古川の。

水の泡沫我いかに。人を徒にや。

思ふらん人を徒にや思ふらん

いかに申し候。方々の名は何と申し

候ぞシテ 浮雲流水と申し候狂言 また

あれなる人の名をば何と申し候ぞ

浮雲流水と申し候。シテ いや某は

浮雲。あれなる者は流水にて候。

カカル
シテ

シテ

上
歌
地

次
第
キ

名
ノ
リ

一
ツ
シ
レ
テ

上
歌
地

狂
言

ツ
レ

シテ

又あれなる御方の御名字をば
何と申し候ぞ。シテ いや苦しからず候。

ワキ

シテ

たゞ放下が参りたると御申し候へ。
いかに面々に不審申したき事の候
承り候ワキ 凡そ沙門の形と云つば。

十力の数珠を、手に纏ひ。忍辱二諦の
衣を著。罪障懺悔の袈裟を掛けて

こそ僧とは申すべけれ。異形の出立

心得ず候。また見申せば柱杖に

団扇を添へて持たれたり。団扇の

一句承りたく候カカル それ団扇と

申すは。動く時には清風をなし。

静かなる時は明月を見ず。明月

清風たゞ動静の内になれば。諸法を

心が所作として。真実修行の

便にて。我等が持つは道理なり。

咎め給ふぞ。愚かなるワキ 団扇の

一句面白う候。今一人は弓矢を

帶し給ふ。弓もお僧の道具ざうか

カカル
テ

それ弓と申すは本末に。烏兎の姿を
象り。日月をこゝに表し。淨穢不二の

祕法を表す。されば愛染明王も。

神通の弓を張り。方便の矢をつま

よつて。カカル 四魔の軍を破り給ふ

されば我等もこれを持ち。されば

我等もこれを持ちて。引かぬ弓。

放さぬ矢にて射る時は。中らず

しかも。外さぶりけりと。かやうに

詠歌もあり知らずな物な

宣ひそ。知らずな物な宣ひそ

さて放下僧は何れの祖師禪法を

御伝へ候ぞ。面々の宗体が承り

たく候シテ 我等が、宗体と申すは。

教外別伝にして。言ふも言はれず

説くも説かれず。言句に出せば教に

落ち。文字を立つれば宗体に背く。

たゞ一葉の翻る。風の行方を。御覽ぜよ
げにく面白う候。さて坐禪の公案

上
地
歌

ワ
キ

カ
カ
ル
ワ
キ

何と、心得候べき カカル 入つては

幽玄の底に同じ。出でゝは三昧の

門に遊ぶ ワキ 自身自仏はさて如何に

白雲深き処金龍躍る ワカル 生死に

住せば シテ 輪廻の苦 ワキ 生死を離れば

断見の科 ワキ さて向上の一路は如何に

切つて三断となす シテ 暫く。切つて

三断となすとは。禅法の言葉なる

を。 カカル お騒ぎあるこそ愚かなれ

何とたゞなかくに磐手の山の

岩躑 つし。色には出でじ南無三宝

をかしの人の心や 物著

されば大小の根機を嫌はず。 地

持戒破戒を扱はず 有無の 地

二偏に落つる事なく。みな成仏

する例あり シテ かるが故に草木も

法身の相を現し オガタ 地 柳は緑花は

紅なる。その色々を現せり
青陽の春の朝には。谷の戸出づる

うぐひすの。凍れる涙解け初めて。

雪消の水の泡沫に。相宿りする

蛙の声。聞けば心のあるものを。

目に見ぬ秋を風に聞き荻の葉

そよぐ。古里の。田の面に落つる雁

鳴きて稲葉の雲の夕時雨。妻恋ひ

かぬる小牲鹿の。たゞずむ月を

山に見て。指を忘るゝ思ひあり

浦の湊の釣舟は 地 魚を得て筥 うえ

捨つ。これを見。かれを聞く時は。

嶺の嵐や谷の声。夕べの煙朝霞。

みなこれ。三界唯心の。ことわり

なりと思し召し。心を悟り給へや

月の為には憂き雲の 地 種と心や。

なりぬらん 羯鼓 シテ

面白の。花の都や 地 筆に書くとも

及ばじ。東には。祇園清水落ち来る

滝の。音羽の嵐に。地主の桜は散り
牧り。西は去輪。嗟哉の即寺回らば

廻れ。水車の輪の。臨川堰の川波。
川柳は。水に揉まるゝ。枝垂柳は。

風に揉まるゝふくら雀は。竹に

揉まるゝ都の牛は。車に揉まるゝ

茶臼は挽木に揉まるゝ。げにまこと。

忘れたりとよ筑子は放下に揉ま

るゝ。筑子の二つの竹の。代々を

重ねてうち治まりたる御代かな

さのみは何と裏つむべきと。兄弟共に

抜き連れて。思ふ敵に走り寄り

この年月の恨の末。今こそ通れ。

願ひのまゝに。敵をぞ討つたりける

かくて兄弟念力の。かくて兄弟

念力の。その期のありて忽ちに。

親の敵を討つ事も。孝行深き故に

より。名を末代に。留めけり名を

末代に留めけり

〔作者〕 金春禪竹(二四〇五—一四七〇頃)、宮増(不明)等

諸説あるが確定できず。

〔解説〕 放下はささら、羯鼓などの囃を用いて曲芸、軽わざ等を演ずる大道芸人の一種、僧形のもを特に放下僧といった。本曲は兄弟がともに語らい、親の敵を討つ仇討ち譚から材を取っている。遊芸人になりすまし、敵を油断させ、禅問答で話をおもしろく展開させ本懐をとげる。

又、他の底本には「人の多く集まり候ふは瀬戸の三島にて」とあり、当時のこの近辺のにぎわいぶりが想像される。

ツシ
レテ

地

キリ